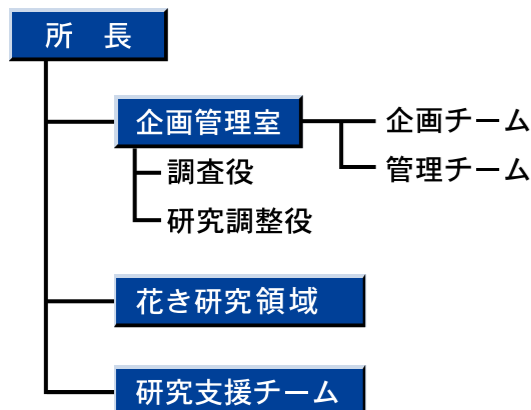


組織



花き研究所は独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構（農研機構）の内部研究所です。

農研機構は5年間の中期計画を掲げて農業にかかわるあらゆる課題の解決に向けて研究を続けています。2011年から始まる第3期においては、実施すべき研究課題を大課題、中課題として整理しプロジェクト型の研究推進を図ります。

花き研究所では主に3つの中課題を担当し、第1期、第2期に引き続いて花きの開花調節、育種、品質保持に関する研究を実施します。

研究所データ

職員数（平成24年4月1日現在）

一般職	4（名）
技術専門職	3
研究職	34

主な研究施設（延べ面積）

研究本館	2599.59（㎡）
一般栽培温室（6棟）	1143.44
閉鎖系温室	446.95
生理遺伝実験棟	619.5

所在地



沿革および研究組織の変遷

- 1902年 農事試験場園芸部が静岡県興津町に創設。
- 1921年 園芸試験場として独立。
- 1951年 九州農業試験場園芸部（福岡県久留米市）に花き育種研究室を新設。
- 1958年 農業技術研究所園芸部（1961年園芸試験場に改組）（神奈川県平塚市）に花き栽培研究室が発足。
- 1973年 野菜試験場が発足。花き研究は本場（三重県津市、愛知県武豊町）と久留米支場の計5研究室体制で発足。
- 1974年 三重県安濃町に用地を取得し、圃場及び施設整備を開始。
- 1981年 津市一身田から安濃町へ移転。
- 1986年 野菜・茶業試験場が発足。本場に花き部（4研究室）を新設。久留米支場に緑化植物研究室（鹿児島県枕崎市）を新設。
- 1991年 久留米支場緑化植物研究室（枕崎）を花き部育種法研究室（本場）に振り替え、花き研究体制を強化。
- 1996年 花き部に上席研究官、病害研究室を新設
- 2001年 独立行政法人農業技術研究機構花き研究所（茨城県つくば市、2部8研究室）が発足。久留米支場花き研究室は九州沖縄農業センターに移行。
- 2003年 独立行政法人農業・生物系特定産業技術研究機構花き研究所へと名称変更。
- 2006年 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構花き研究所へと名称変更。

交通

●TX つくばエクスプレス

- 最寄り駅：みどりの
関東鉄道バス「農林団地循環」または「土浦駅」行きに乗車「榎戸」下車
国道408号線をつくば方面に進み、徒歩10分（所要時間25分）または、タクシーで「みどりの駅」より乗車（所要時間15分）
- 最寄り駅：つくば
関東鉄道バス「つくばセンター」のりば4番線より「牛久駅」行きに乗車「果樹研究所入口」下車、徒歩5分（所要時間20分）または、タクシーで「つくば駅」より乗車（所要時間15分）

●JR 常磐線

- 最寄り駅：牛久
関東鉄道バス「生物研・大わしキャンパス」、「つくばセンター」または「筑波大学病院」行きに乗車
「果樹研究所」下車、徒歩1分（所要時間25分）または、タクシーで「牛久駅」より乗車（所要時間20分）

●高速バス

- 東京駅八重洲南口発（つくば号）
JR/関東鉄道バス「つくばセンター」行きに乗車（所要時間60～90分）
「つくばセンター」下車
関東鉄道バス「つくばセンター」のりば4番線より「牛久駅」行きに乗車「果樹研究所入口」下車、徒歩5分（所要時間20分）
または、タクシーで「つくばセンター」より乗車（所要時間15分）

農研機構 花き研究所

National Agriculture and Food Research Organization
Institute of Floricultural Science (NIFS)
〒305-8519 茨城県つくば市藤本2-1
TEL 029-838-6801（代表） FAX 029-838-6841
<http://www.naro.affrc.go.jp/flower/index.html>
問い合わせ先 企画管理室
(TEL 029-838-6801 Email www-flower@naro.affrc.go.jp)

(2012.4 3,000)

独立行政法人 農業・食品産業技術総合研究機構



花き研究所

National Agriculture and Food Research Organization
Institute of Floricultural Science (NIFS)



花き研究所が主に担当する中課題（2011～2015年）

1. 生育開花機構の解明によるキク等の主要花きの効率的計画生産技術の開発
2. 分子生物学的手法による新形質花きの創出
3. 農畜産物の品質評価・保持・向上技術の開発

生育開花機構の解明によるキク等主要花きの効率的計画生産技術の開発

キク等主要花きにおいて、花成から開花に至る過程の分子生理学的な解析を進め、高精度な開花調節技術を開発します。また、生産性向上のために、単位面積当たりの収穫本数の増加と品質の向上に有効な技術を開発します。これらを組み合わせて生育開花機構の解明に基づいた効率的な計画生産技術を開発し、我が国の花き生産の国際競争力の向上に貢献することを目指します。



トルコギキョウの冬季栽培マニュアル



花き病害図鑑webサイト <https://kakibyو.dc.affrc.go.jp/>
現在500病害以上を網羅し、サイトから診断依頼も受け付けています



明期終了時の短時間遠赤色光照射 (EOD-FR) 処理が数種切り花類の開花および茎伸長に及ぼす影響
左:無処理, 右: EOD-FR処理

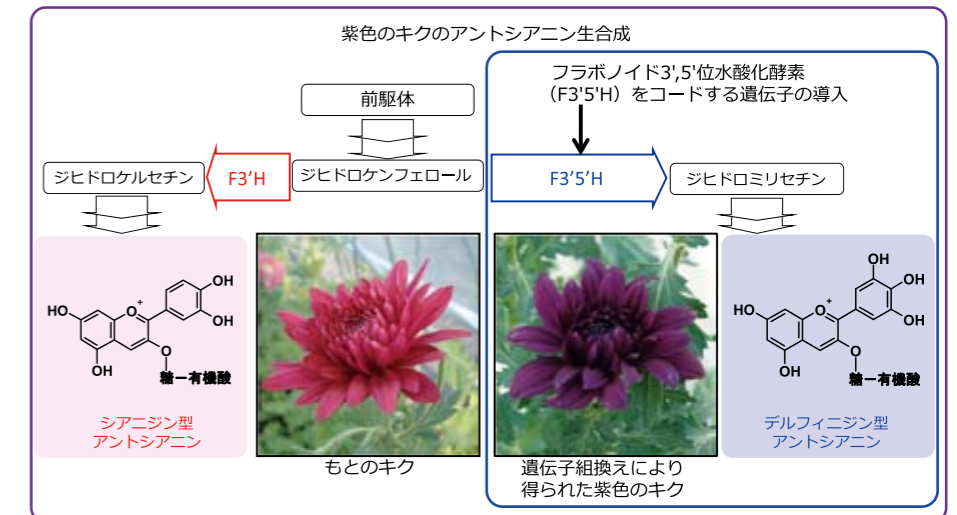
分子生物学的手法による新形質花きの創出

花色・香気・花形等、花きの重要形質に関連する遺伝子の単離・解析を通して重要形質の発現機構を明らかにし、遺伝子組換えによる形質改変技術を開発します。特にアントシアニンの構造を改変した青色花色キクを作出するとともに不稔形質を付与し、実用化に値する新花色キクの作出を目指します。

また、カーネーション等の重要花き品目を対象に、早生性や高生産性等、低コスト生産につながる形質を付与した高付加価値新品種作出を目指すとともに、有用形質に連鎖したDNAマーカーの開発等、育種の効率化に繋がる技術の開発を行います。



萎凋細菌病抵抗性カーネーション“花恋ルージュ”の花(上)と育成に利用した野生種 *Dianthus capitateus* (下)

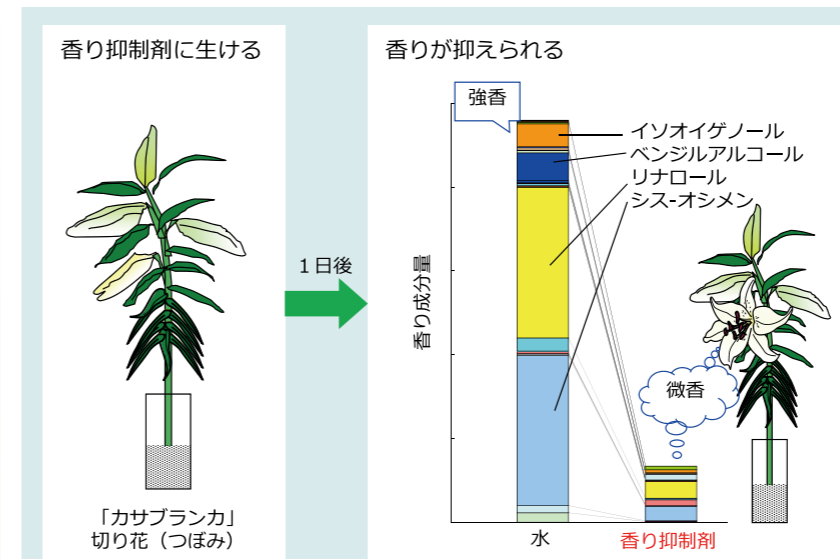


F3'5'H遺伝子の導入によるキクの花色改変

花きの品質評価・保持・向上技術の開発

花きの収穫後の生理機構を分子生物学的に解析し、日持ち保証に対応した品質保持技術の開発を行います。特に、高温と新規有望切り花に対応した品質保持技術の開発を目指します。

また、花色の発現機構と香気成分の生成・発散機構の解明と制御技術の開発を行うとともに、香気等がヒトにもたらす効果について検証します。



香り抑制剤の処理効果



蒸留水(左)およびAVG+NAA(右)処理後7日目のトルコギキョウ「海ほのか」切り花の様子